Japanese Association for Religious Studies

（3）鈴木岩弓「東日本大震災の土葬選択にみる死者観念」（座小田豊・尾崎彰宏編『今を生きる　1人間として』東北大学出版会、二〇一二年）、一〇三―一二一頁。

（4）東北大学文学研究科では、二〇一二年四月より「実践宗教学寄附講座」を設置し、こうした問題を検討し、超宗派超宗教的にそうした対応を取れる専門職「臨床宗教師」の養成システムの構築を目指している。以下を参照。
http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html

（5）古野清人「まえがき」（『古野清人著作集』五、三一書房、一九七三年）、一頁。

デジュリとデファクトの公益

中牧　弘允

現在勤務している吹田市立博物館は今年創立二〇周年をむかえる地域博物館である。吹田市には日本初のニュータウンである千里ニュータウンがあり、そのためもあってか市民活動はきわめて活発で、博物館にも積極的な協力を惜しまない。実際、いくつかの展示には実行委員会方式が採用され、多くの市民が実行委員として参画している。その意味で、吹田市立博物館は市立の博物館ではあるけれども、市民博物館の様相を強く呈している。

コンピューターの概念であるデジュリ（de jure）・スタンダードとデファクト（de facto）・スタンダードを援用すると、デジュリ・ミュージアムとしては市立博物館であるけれどもデファクト・ミュージアムとしては市民博物館でもあると換言できるかもしれない。そこで、本日の議論の主たる対象である公益の問題もデジュリとデファクトに分けてかんがえてみたいとおもう。

稲場圭信氏の報告は「共感縁」をとりあげていたが、デファクトの公益とは何かという問いかけのようにおもわれた。東日本大震災のあとにさまざまなネットワークがつくられたが、地縁、血縁、社縁とはことなる共感縁のようなものはデジュリというよりはデファクトな縁として結ばれ、はかなく消えゆくものもあれば、永続性をもつものもあるようにみえる。

デファクトの公益は限られた条件下で機能する。たとえば震災というような危機的な状況のなかで意味をもつもののように聞こえたが、デジュリの自治体とか行政とかと連携して永続化するものかどうかが問われているように思う。またフィールドワークよりはアクション・リサーチだと震災後の特定条件下での研究を位置づけたが、これは最後の報告者である鈴木氏の議論ともつながってゆく。すなわち、宗教研究者がアクション・リサーチとして何ができるのかという公益に関連しているからである。

二番目の岡田真美子氏の報告に関して吹田の例をあげれば、里山を切り崩しタヌキやキツネを追いやって造成した千里ニュータウンの非宗教的性格に言及できるかもしれない。ただし、吹田市立博物館は市民によって「神殿」のような役割を果たす施設になっているようにも感じている。しかも、紫金山公園の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

緑に覆われているので、「鎮守の森」のような感覚に陥ることもある。ある意味で環境を破壊してつくった町に環境の保全をはかろうとする市民運動がおこり、その聖なる価値を体現する空間として博物館が意味をもっているようだ。宗教の公益をになうネットワークをかんがえるとき、疑似宗教的な聖なる活動も視野に入れて、市民活動とのつながりをうかがえればと思う。

三番目の小原克博氏の報告で特に印象的だったのは、宗教・宗派を超える祈りがデファクトの公益性として実現されるのかどうかという問題である。宗教の祈りには敵を滅ぼすという逆のベクトルもはたらいているという指摘を踏まえれば、デファクトの公益をになう主体として宗教が優位な立場にあるのかどうか。記憶を留め、紡いでいくというような行為において宗教は優位なのか、市民運動や学術活動との関連も含めて明快にしていただければ幸いである。

最後の鈴木岩弓氏の報告では、被災現場で活動している僧侶の姿を見て葬儀を依頼するとか、手と手を握り合って引導を渡すとか、共感を呼ぶような公益性のある活動の事例がいろいろとりあげられた。また東北大学には臨床宗教師を養成する講座が開設されたが、それも東日本大震災の復興活動のアクション・リサーチからはからずも浮上してきたように思われる。教団や宗派の宗教ではなく、また宗教者としてのアイデンティティを多少制限するような条件下でやっていく活動が何をめざしているのか、もう少し詳しくうかがいたい。

臨床宗教師の養成はたしかにアクション・リサーチから生まれたけれど、めざすところの活動はむしろリサーチ・アクションの方向なのではないか。被災地域の人々にとって重い意味をもつ価値をあつかうわけだから、実践的な役割を担っている。「神殿」としての博物館は宗教施設ではないが、市民にとっての重要な価値を保全し継承発展させていくとすれば、それもリサーチ・アクションのほうになる。宗教や宗教研究の公益はこういったことも視野に入れる必要があるだろう。

シンポジウム記録

櫻井　治男

シンポジウムは、櫻井治男（モデレーター）による趣旨説明の後、稲場圭信「災害時における宗教者と連携の力―その意義と今後の課題―」、岡田真美子「宗教の公共力―自然とのネットワーキングを考える―」、小原克博「祈りの公益性をめぐる試論―三・一一によって照り出される「宗教」の境界―」、鈴木岩弓「東日本大震災後の『絆』再興にみる宗教の〝ちから〟」と題した各氏の発表があり、中牧弘允氏による発題者へのコメントが行われた。つづいて、各パネリストからコメントへの応答をもって終了した。時間的な制約により、会場からの質問は用紙でなされ、パネリストが適宜応答のなかに含むこととなり、論点を絞っての議論を展開することが出来なかったのはモデレーターの責任でありお詫びしたい。各パネリストの発題内容及びコメントは、本誌に別途掲載されており、詳細はそれらを参照いただき、本記録ではシンポジウムの発題要旨とコメン

NII-Electronic Library Service